『教行信証』から、「他力」という言葉を抽出して見る

遍立寺衆徒　大竹　功

『教行信証』から「他力」という言葉を抽出する

（引文は明朝体、親鸞御自釈はゴチック体、他力は赤字とする）

●「他力　1」　一六八頁

他の勝徳を破す。四つには、顛倒の善果よく梵行を壊す。五つには、ただこれ自力にして他力の持つなし。これ等のごときの事、目に触るるにみな是なり。たとえば、陸路の歩行はすなわち苦しきがごとし。「易行道」は、いわく、ただ信仏の因縁をもって浄土に生まれんと願ず。仏願力に乗じて、すなわちかの清浄の土に往生を得しむ。仏力住持して、すなわち大乗正定の聚に入る。正定はすなわちこれ阿毘跋致なり。

●「他力　2」　一九〇頁

ここをもって『論註』に曰わく、「かの安楽国土は、阿弥陀如来の正覚浄華の化生するところにあらざることなし。同一に念仏して別の道なきがゆえに」とのたまえり。已上

しかれば真実の行信を獲れば、心に歓喜多きがゆえに、これを「歓喜地」と名づく。これを初果に喩うることは、初果の聖者、なお睡眠し懶堕なれども、二十九有に至らず。いかにいわんや、十方群生海、この行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず。かるがゆえに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力と曰う。

●「他力　3」　一九三頁

また云わく、もし久行の人の念は、多くこれに依るべし。もし始行の人の念は、数を記する、また好し。これまた聖教に依るなり、と。已上

これすなわち真実の行を顕す明証なり。誠に知りぬ。選択摂取の本願、超世希有の勝行、円融真妙の正法、至極無碍の大行なり。知るべしと。

他力と言うは、如来の本願力なり。

（論註）に曰わく、「本願力」と言うは、大菩薩、法身の中にして常に三昧にましまして、種種の身・種種の通・種種の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起こるをもってなり。たとえば阿修羅の琴の鼓する者なしといえども、音曲自然なるがごとし。これを教化地の第五の功徳相と名づく。

●「他力　4」　一九五頁

願に言わく、「設い我仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に来生して、究竟して必ず一生補処に至らしめん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧を被て、徳本を積累し、一切を度脱して、諸仏の国に遊び、菩薩の行を修して、十方諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正真の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行を現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覚を取らじ」と。仏願力に縁るがゆえに、常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。常倫に超出し諸地の行現前するをもってのゆえに、このゆえに速やかな

ることを得る、三つの証なり。これをもって他力を推するに増上縁とす、しからざることを得んや。

一九六頁

当にまた例を引きて、自力・他力の相を示すべし。人、三塗を畏るるがゆえに、禁戒を受持す。禁戒を受持するがゆえに、よく禅定を修す。禅定を修するをもってのゆえに、神通を修習す。神通をもってのゆえに、よく四天下に遊ぶがごとし。かくのごとき等を名づけて自力とす。また、劣夫の、驢に跨りて上らざれども、転輪王の行くに従えば、すなわち虚空に乗じて四天下に遊ぶに障碍するところなきがごとし。かくのごとき等を名づけて他力とす。愚かなるかな、後の学者、他力の乗ずべきを聞きて、当に信心を生ずべし。自ら局分することなかれ、となり。已上

（観経義疏）元照律師の云わく、あるいはこの方にして惑を破し真を証すれば、すなわち自力を運ぶがゆえに、大小の諸経に談ず。あるいは他方に往きて法を聞き道を悟るは、須らく他力を憑むべきがゆえに、往生浄土を説く。彼・此異なりといえども、方便にあらざることなし、自心を悟らしめんとなり、と。已上

●「他力　5」　一九九頁

しかるに教について、念仏・諸善、比校対論するに、難易対、
頓漸対、横竪対、超渉対、順逆対、大小対、多少対、勝劣対、
親疎対、近遠対、深浅対、強弱対、重軽対、広狭対、純雑対、
徑迂対、捷遅対、通別対、不退退対、直弁因明対、名号定散対、

理尽非理尽対、勧無勧対、無間間対、断不断対、相続不続対、
無上有上対、上上下下対、思不思議対、因行果徳対、自

二〇〇頁

説他説対、回不回向対、護不護対、証不証対、讃不讃対、付
嘱不嘱対、了不了教対、機堪不堪対、選不選対、真仮対、仏
滅不滅対、法滅利不利対、自力他力対、有願無願対、摂不摂対、
入定聚不入対、報化対あり。この義かくのごとし。しかるに
本願一乗海を案ずるに、円融、満足、極促、無碍、絶対不二
の教なり。

●「他力　6」　二〇六頁

本師、曇鸞は、梁の天子常に鸞のところに向こうて菩薩と礼したてまつる。
三蔵流支、浄教を授けしかば、　仙経を焚焼して楽邦に帰したまいき。
天親菩薩の『論』、註解して、　報土の因果、誓願に顕す。
往・還の回向は他力に由る。　正定の因はただ信心なり。
惑染の凡夫、信心発すれば、　生死即涅槃なりと証知せしむ。
必ず無量光明土に至れば、　諸有の衆生、みなあまねく化すといえり。

●「他力　7」　二三六頁

しかるに菩提心について二種あり。一つには竪、二つには横なり。また竪について、また二種あり。一つには竪超、二つには竪出なり。「竪超」・「竪出」は権実・顕密・大小の教に明かせり。歴劫迂回の菩提心、自力の金剛心、菩薩の大心なり。また横について、また二種あり。一つには横超、二つには横出なり。

237頁

「横出」は、正雑・定散・他力の中の自力の菩提心なり。「横超」は、これすなわち願力回向の信楽、これを「願作仏心」と曰う。願作仏心は、すなわちこれ横の大菩提心なり。これを「横超の金剛心」と名づくるなり。横竪の菩提心、その言一つにしてその心異なりといえども、入真を正要とす、真心を根本とす、邪雑を錯とす、疑情を失とするなり。欣求浄刹の道俗、深く信不具足の金言を了知し、永く聞不具足の邪心を離るべきなり。

●「他力　8」　三三一頁

ここをもって『経』（観経）には「教我観於清浄業処」と言

えり。「清浄業処」と言うは、すなわちこれ本願成就の報土なり。「教我思惟」と言うは、すなわち方便なり。「教我正受」と言うは、すなわち金剛の真心なり。「諦観彼国浄業成者」と言

三三二頁

えり、本願成就の尽十方無碍光如来を観知すべしとなり。「広説衆譬」と言えり、すなわち十三観これなり。「汝是凡夫心想羸劣」と言えり、すなわちこれ悪人往生の機たることを彰すなり。「諸仏如来有異方便」と言えり、すなわちこれ定散諸善は方便の教たることを顕すなり。「以仏力故見彼国土」と言えり、これすなわち他力の意を顕すなり。「若仏滅後諸衆生等」と言えり、すなわちこれ未来の衆生、往生の正機たることを顕すなり。「若有合者名為麁想」と言えり、これ定観成じがたきことを顕すなり。「於現身中得念仏三昧」と言えり、すなわちこれ、定観成就の益は念仏三昧を獲るをもって観の益とすることを顕す、すなわち観門をもって方便の教とせるなり。

●「他力　9」　三四一頁

「門余」と言うは、「門」はすなわち八万四千の仮門なり、「余」はすなわち本願一乗海なり。　おおよそ一代の教につい

て、この界の中にして入聖得果するを「聖道門」と名づく、「難行道」と云えり。この門の中について、大小、漸頓、一乗・二乗・三乗、権実、顕密、竪出・竪超あり。すなわちこれ自力、利他教化地、方便権門の道路なり。安養浄刹にして入聖証果するを「浄土門」と名づく、「易行道」と云えり。この門の中について、横出・横超、仮・真、漸・頓、助・正・雑行、雑修・専修あるなり。「正」とは五種の正行なり。「助」とは名号を除きて已外の五種これなり。「雑行」とは正助を除きて已外をことごとく雑行と名づく。これすなわち横出・漸教、定散・三福、三輩・九品、自力仮門なり。「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づく

三四二頁

るなり。これすなわち専の中の専、頓の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。

『教行信証』から「他力」という言葉を抽出する意義

遍立寺衆徒　大竹　功

この『教行信証』からの引文は、『教行信証』において「他力」がどのようなところで親鸞は出しているのかということを、考えんがためである。親鸞御自釈の「他力」と引文での「他力」と根本的な違いはどこにあるのか。そういうことも検討したいところである。その「他力」という言辞の背景に、『仏説無量寿経』があるのか『観無量寿経』あるのか、そのことの検討は重要であろう。

岩波仏教辞典によると、「他力」次のように出ている。

他力（自力：じりき）の対語として用いられる。一般には仏・菩薩による加被力（かぴりき）加護をさす。真宗では阿弥陀仏の本願のはたらきをさし、信心を得ることも種々の行いも、すべて仏の願力によるとする。他人の力と解するのは誤りで、いわゆる自力を支え自力の根源をなす超越的な力を意味する。中国の曇鸞（どんらん）は『往生論註』の中で、「人にさとりを求めさせる力も、さとりを開いた人が迷っている人々を教え導く力も他力による」（往還回向由他力）といっている。「ただひとすじに仏の本願を信じ、我が身の善悪をかへりみず、決定往生せんと思ひ申すを他力の念仏といふ」〔黒谷上人語灯録１２〕。

↓自力、他力本願。

と出ているのだが、このことが「他力」ということを、端的に表現しているのかどうか、私は論評はしないが、ただ、「この程度か」という気持ちであって、浄土真宗門徒においては信用に足る辞典ではないなと思う。

簡単に言い切れないのである。「他力」ということがいかなる仏教上の「法」において成り立っていることなのか。そのことがはっきりしなければ、「他力」ということが我田引水の妄語になっていくだけである。この責任は、岩波書店に係る仏教学者にあるのではない。浄土真宗の教学に不真面目だった、親鸞聖人の教えよりも教団護持を優先した学者が、こういうようなことを辞典に掲載していることを許しているという為体（ていたらく）ということでしかないのである。

せっかく浄土真宗の学者が江戸時代に「他力の六義」ということを通して「他力」ということを明らかにしようとしたのだが、それに応えることをずっとしてこなかった。いやになるほど「他力」「本願」「おたすけ」などを教団の専門用語で使ってきたのだが、その実誰も「他力」ということを自らの課題にしなかった。まあ、その程度に高倉教学であり近代教学なのだ。

他力について学ぶ者はもはや出てこないのかもしれないが、微かな希望を持って、私は光遠院慧空→香草院釈彰敏→雲集院釈正元と伝わってきた有るか無きかの伝灯を、いくばくかの資料とともに、インターネットで公開した。私自身は老骨がきしみ始めているのでこれ以上手が出せない。これまで公刊されなかった資料などを公にすることで、今後において若き学徒で「浄土真宗における他力」ということを明らかにしようとする人物が出ることを冀っている。

以　上

令和三年九月一五日